

学位論文の要約

三 重 大 学

所 属	三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻（博士後期課程） 看護学領域 看護教育学分野	氏 名	牛場 かおり
-----	---	-----	--------

主論文の題名

多職種が関わる退院支援における病棟看護師のコーディネーション自己評価尺度の開発

主論文の要約

I. 序論

地域包括ケアシステムを推進していくには、病院から在宅への移行時のシームレスな退院支援が必要であり、そのために病棟看護師は、多職種で関わる退院支援チームをコーディネーションすることが期待されている。しかし、先行研究では、退院支援に関して病棟看護師の役割認識が低いことや役割認識が混乱していることが報告されている。そのため、病棟看護師は退院支援チームにおいて自らの役割を過小評価し、コーディネーションの実践を妨げているのではないかと考えられる。

また、これまでの日本の病棟看護師の退院支援に関する研究では、“調整”という用語が広く使用され、“コーディネーション”という用語は殆ど使用されてこなかった。その理由として、病棟看護師のコーディネーションが見えにくい関わりであるためだと考えられる。そこで、退院支援チームにおける病棟看護師のコーディネーションを可視化し、それが実践できているかを病棟看護師が自己評価できるようになれば、退院支援チームにおける自身の役割認識の向上へと繋がるのではないかと考える。それにより、多職種が関わる退院支援チームの中で病棟看護師が行う退院支援の質が向上し、患者・家族のシームレスな在宅移行に繋がることが期待できる。

II. 目的

本研究の目的は、多職種が関わる退院支援における病棟看護師のコーディネーション(Coordination by Ward Nurses in Discharge Support: CWNDS)の内容を可視化し、病棟看護師が CWNDS を自己評価できる尺度を開発することである。

III. 方法

1. 尺度項目の抽出・尺度原案の作成（予備調査 1）

CWNDS の内容を可視化し、尺度の項目を抽出するために、退院支援に関わる多職種医療専門職である病棟看護師 8 名、入退院支援部門看護師 8 名、他職種 7 名（理学療法士 2 名、医療ソーシャルワーカー 5 名）の計 23 名に対して半構造化面接を実施した（承認番号：U2020-019）。得られたデータは質的帰納的に分析を行った。病棟看護師からは 39 サブカテゴリー、14 カテゴリー、入退院支援看護師からは 18 サブカテゴリー、12 カテゴリー、他職種からは 11 サブカテゴリー、9 カテゴリーを抽出した。これらのカテゴリーを基に、『ケアにつなぐための患者・家族の意向の

くみ取り』『患者・家族・院内の多職種間における意見の相違に対して方向性を定める関わり』『患者・家族・院内の多職種間の情報伝達・共有』『退院後の問題に患者・家族・院内の多職種が合意できるようにする関わり』『院内外の関係者によって退院後の療養環境を整える関わり』の5要素が抽出された。この結果に、「退院支援における病棟看護師のコーディネーションの概念分析」で抽出された6つの属性【ケアにつなぐために患者の意向をくみ取る】【患者・家族・多職種の仲をとりもつ】【関係職種間で目標・情報をつなぐ】【退院後の問題解決方法を捻出する】【退院後の環境を整える】【新たなシステムを取り入れる】の結果を加えて CWNDS 尺度の項目を検討した。その結果、【患者・家族の意向をケアにつなぐ】【患者・家族・多職種の仲をとりもつ】【関係職種間で目標・情報をつなぐ】【退院後の問題解決方法を捻出する】【退院後の環境を整える】【新たなシステムを取り入れる】の6つの構成概念からなる35項目の CWNDS 尺度原案を作成した。

2. 尺度決定案の作成（予備調査 2-1、2-2）

尺度原案の内容妥当性は、表面的妥当性と論理的妥当性で検証を行った。専門家を対象とした検討（予備調査 2-1）と病棟看護師を対象としたプレテスト（予備調査 2-2）により内容妥当性を確認し、6つの構成概念からなる28項目の尺度決定案となった。

3. 尺度決定案の信頼性と妥当性の検証（2回の本調査）

対象者は、東海地方で了承が得られた200床以上の42病院の病棟看護師1668名とした。1回目は尺度決定案28項目（以下、本尺度とする）と基準関連妥当性を検討するため病棟看護師の退院支援実践自己評価尺度（以下、既存の DPWN 尺度とする）を調査し、2回目は本尺度の再テスト法を行った。各病院の担当者に、1回目と2回目の質問紙を同封して送付し、対象者への配付を依頼した。

本尺度28項目について項目分析を行い、構成概念妥当性の検討として探索的因子分析、確認的因子分析を行い、基準関連妥当性の検討として既存の DPWN 尺度と本尺度との相関を検討した。信頼性の検討として、尺度の内的整合性を尺度全体および下位尺度の Cronbach's α 係数を算出した。再テスト法では、調査1回目と2回目の尺度得点を相関係数で検討した。

IV. 倫理的配慮

本研究は、研究者が所属する施設の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号:U2023-001）。研究対象者には、研究の内容や倫理的配慮等を説明文書に明記し、返送された研究同意の回答欄にチェックの記載があるものを同意ありとみなした。

V. 結果

1回目の調査は、682名から回答が得られ（回収率40.8%）、そのうち研究同意の回答欄にチェックの記載が無かった117名、退院支援経験が無いなどの23名の計140名を除き、542名（有効回答率79.4%）を分析対象とした。2回目の調査は、391名から回答が得られ（回収率23.4%）、そのうち1回目の調査で除外した78名を除外し、313名（有効回答率80.0%）を分析対象とした。両調査とも欠損データが5%以上の回答はみられなかった。

項目分析での除外項目は無かった。探索的因子分析では、最尤法、プロマックス回転を用いた。その結果、因子負荷量.40以上を示さなかった1項目と、2因子に渡り.40以上の因子負荷量を

示した 1 項目を除外した。26 項目で因子分析を行った結果、3 因子となり、累積寄与率は、54.3% であった。そして、第 1 因子を『在宅移行に向けた関係者間の橋渡し』、第 2 因子を『退院支援システムの改良』、第 3 因子を『患者・家族の意向の尊重』と命名した。次に確認的因子分析を行い、適合度指標は $GFI = .86$ 、 $AGFI = .83$ 、 $CFI = .90$ 、 $RMSEA = .072$ であった。

基準関連妥当性の検討では、既存の DPWN 尺度の下位尺度と高い相関を示したのは、CWNDS の下位尺度『在宅移行に向けた関係者間の橋渡し』で、 $rs = .44 \sim .66$ ($p < .001$) であった。その他の CWNDS の下位尺度『退院支援システムの改良』は、 $rs = .26 \sim .54$ ($p < .001$) であり、『患者・家族の意向の尊重』は、 $rs = .27 \sim .51$ ($p < .001$) であった。

信頼性の検討では、CWNDS 尺度の全体と下位尺度の Cronbach's α 係数を求めた。尺度全体 $\alpha = .94$ 、第 1 因子『在宅移行に向けた関係者間の橋渡し』は、 $\alpha = .93$ 、第 2 因子『退院支援システムの改良』は $\alpha = .89$ 、第 3 因子『患者・家族の意向の尊重』は、 $\alpha = .89$ を示し、内的整合性が保たれていた。安定性の確認のために再テスト法を実施し、313 名の 1 回目と 2 回目の尺度得点の相関係数を Spearman の順位相関係数で求めた。結果、尺度全体の相関係数は、 $rs = .65$ であり、各因子の相関は、 $rs = .57 \sim .66$ であった。

VI. 考察

1. CWNDS 尺度の妥当性と信頼性

病棟看護師の CWNDS を可視化し、自己評価できる尺度の開発を試みた。探索的因子分析の結果、3 因子構造となった。また、確認的因子分析の適合度は $GFI = .86$ 、 $AGFI = .83$ 、 $CFI = .90$ 、 $RMSEA = .072$ とやや低い指標もあったが許容範囲であった。さらに、基準関連妥当性では、尺度全体の相関係数は、 $rs = .65$ であり中等度の相関を示した。可視化した CWNDS の 3 因子のうち第 2 因子の『退院支援システムの改良』は、これまでの尺度では見られなかった内容を示したことから、新規性に繋がると考えられる。因子分析で抽出された 3 因子は、退院支援での CWNDS の実践の現状を反映した構造を示しており、当初に想定していた 6 つの構成概念を包含すると考えられ、本尺度の構成概念妥当性は概ね確保されたと判断した。また、基準関連妥当性では中等度の相関であったため、妥当性は概ね確保されたと考えられる。信頼性に関しては、Cronbach's α 係数は高い値を示し、再テスト法で中程度の相関であったため、信頼性も概ね確保されたと考えられる。

以上のことから、CWNDS 尺度は、多職種が関わる退院支援において同時進行的に行う CWNDS を測定するのに妥当な尺度であると考えられる。

2. CWNDS 尺度の活用可能性

本研究で作成した CWNDS 尺度は、先行研究からの既存の知見だけでなく、実際の病棟看護師が実践している CWNDS や入退院支援看護師及び他職種から期待されている CWNDS を反映した尺度項目から構成されている。多職種との退院支援における CWNDS を示していることから、病棟看護師が自分の CWNDS の振り返りや CWNDS を高めていくことに活用することができるのではないかと考える。しかし、本調査は、尺度開発を目的としているため、実際に病棟看護師自身の気づきや振り返りの機会になるのか、CWNDS を高めることができるのかについては検証できていない。そのため、今後、これらを実証し、CWNDS 尺度の妥当性を高めていくことが必要である。さらに、個人的な取り組みの知見を集積し、病棟看護師の退院支援における教育プログラム

の開発に繋げていき、その効果を測定するための指標として CWNDS 尺度を使用したいと考えている。

3. 研究の限界と今後の課題

本調査の回収率は、1 回目が 4 割、2 回目が 2 割と低かった。また、質問紙の研究同意へのチェックが無いものが 117 名もあり、有効回答率が 8 割を下回った。これらが対象者の偏りとなり、調査結果に影響を与えている可能性がある。そのため、回収率を高めるための配付方法の検討やチェック漏れを減らすための用紙の作成の工夫が必要である。

さらに、対象とする病院や病棟を一部除外したことにより、本研究における CWNDS 尺度を活用できる病棟が限局されるという限界がある。今後は除外した 200 床以下の病院や小児科や精神科の病棟を研究対象に加え、CWNDS 尺度の適応可能性の検証を行っていく必要があると考える。